

謝辞

本日は私たち、修了生・卒業生のために、このように厳粛で立派な式典を挙げていただき、誠にありがとうございます。またご多忙にも関わらず、ここにご臨席下さいました諸先生方をはじめ、ご来賓の皆様にご心より御礼申し上げます。

先ほどは田中学長の告辞をはじめ、ご来賓の方からのご祝辞を賜り、私たち修了生・卒業生一同、身の引き締まる思いと、感謝の気持ちでいっぱいです。223名の修了生・卒業生が、それぞれの生活と学業を両立し、さまざまなことを抱えながら学習時間を捻出し、ようやく今日の日を迎えることができました。

4年前、学部本科生として歩みだした私の学生生活は、自立学習入門より始まりました。それから、「ひと月に最低、一科目提出」のノルマを課してテキスト履修を進める一方、一回生が履修できる共通科目のスクーリングを順調にこなし、自信をつけていきました。

その自信が粉々に打ち砕かれたのが、専門科目のスクーリングでした。共通科目とは違い、私が在籍しました文学部中国学科の専門科目のスクーリングでは、授業で事前配付資料の中国語読み・和訳、時には漢文書き下しの発表が求められました。それまで中国語を一切知らなかった私は、文法構造はもちろん、中国独自の漢字である簡体字にも戸惑い、その膨大な予習量に、大きな挫折を経験しました。

初めて資料を見た時は、何もできないままあっという間に数日が過ぎ去ってしまいましたが、知識が無ければ努力量でカバーするしかないという覚悟を決め、辞書を片手に連日連夜、奮闘しました。結局、授業に間に合わず、この京都にもノートパソコンを持ち込み、滞在するホテルでも寝ずに準備をした日々が懐かしく思い返されます。

しかしこうした困難は、精神力を鍛え、知識を深めるだけでなく、他の学生とコミュニケーションを深める助けにもなりました。同じ学科の学生に限らず、多くの学友とも親しくなり、励まし合い、ともにその時々
の苦境を乗り越えて参りました。そうした経験と、自らを律し、目標を達成しようとする力を得られたことが大きな自信となって、今の私たちを
支えています。

私の研究テーマでありました中国の思想家・孔子の言葉で、物事を始めから諦めている弟子に対して語ったとされる言葉に次のようなものがあります。

「力足らざる者は中道にして廃す。今女（なんじ）は画れり。」

この「画る」は、くぎる意味の区画の「画」があてられ、自ら「できない」と一線を引くことを表します。力不足の人は進みたくてもそれができないが、画るというのは、本当は進めるのにそれをしないことであって、そうはなっていないか？と問いかける言葉です。

私たちは、困難に直面しても「画る」ことなく、精一杯取り組んで参りました。今日この卒業式に臨み、今後は与える立場として社会に貢献してゆこうと決意を新たにしていますが、通信教育課程の学生として培った、この自律的にやり遂げようとする姿勢を持ち続けながら、これからも歩みを進めて参ります。

これまで学業に打ち込んでこられたのは、熱心なご指導をいただいた先生方、サポートをしていただいた職場の方々、大学職員の方々、そして何より家族の支えがあったからに他なりません。そうした恩に報いるためにも、佛教大学の卒業生として誇りと自覚をもち、それぞれの場所で、本学で学んだ教えを生かして、社会のために力を尽くして参ります。

感謝の気持ちは語り尽くせませんが、学び舎であるこの佛教大学の
益々のご発展を祈念いたしまして謝辞とさせていただきます。

平成 29 年 3 月 25 日

修了生・卒業生代表
文学部中国学科
虎本 義礼